

食品に関するリスクコミュニケーション（東京） - BSEの最新知見を学ぶ - アンケート集計結果

開催日：2004年12月7日（火）

参加者数：199名 回収数：125名 回収率：63%

問1. あなたご自身のことや食品の安全性に関するお考えについてお聞きします。

性別

回答内容	件数	割合
1. 男性	88	70.4%
2. 女性	37	29.6%
無回答	0	0.0%
	125	100.0%

年齢

回答内容	件数	割合
1. 20歳未満	0	0.0%
2. 20歳代	3	2.4%
3. 30歳代	13	10.4%
4. 40歳代	47	37.6%
5. 50歳代	42	33.6%
6. 60歳代	16	12.8%
7. 70歳以上	4	3.2%
無回答	0	0.0%
	125	100.0%

職業

回答内容	件数	割合
1. 消費者団体	22	17.6%
2. 主婦、学生、無職	7	5.6%
3. 生産者	3	2.4%
4. 食品関連事業者	33	26.4%
5. マスコミ	5	4.0%
6. 行政	35	28.0%
7. 食品関連研究・教育機関	3	2.4%
8. その他	16	12.8%
農業団体職員(1) 医療(1) 消費者(1) 試薬メーカー(1) 海外NPO(1) 外食(1) NGO、千葉県エコリーダー連絡協議会(代表)(1) 食品製造者団体(1) 業界団体(1) 生産者、消費者会員を有する有機農業団体(1)		
無回答	1	0.8%
	125	100.0%

本日の意見交換会に参加された動機

回答内容	件数	割合
1. BSE対策に対する不安感があったから	13	10.4%
2. BSE対策についての情報を入手したかったから	87	69.6%
3. 行政や専門家に直接意見を言いたかったから	2	1.6%
4. 業務の一環として参加する必要があったから	21	16.8%
5. その他	2	1.6%
BSEの最新知見を学びたかったから(1) プルシナー教授のご講演を聴きたかったから(1)		
無回答	0	0.0%
	125	100.0%

食品安全に関する意見交換会への参加回数（今回を含めて）

回答内容	件数	割合
1.初めて	30	24.0%
2.2回目	30	24.0%
3.3回目	19	15.2%
4.4回目	9	7.2%
5.5回以上	36	28.8%
無回答	1	0.8%
	125	100.0%

「100%安全な食品はないこと」について、あなたはどのように思われますか。

回答内容	件数	割合
1.強くそう思う	78	62.4%
2.ややそう思う	32	25.6%
3.あまりそう思わない	3	2.4%
4.全くそう思わない	2	1.6%
5.わからない	2	1.6%
無回答	8	6.4%
	125	100.0%

問2. 本日の意見交換会の実施方法についてお聞きします。

開催方法（参加手続き・場所・所要時間）

回答内容	件数	割合
1.とてもよかった	12	9.6%
2.よかった	84	67.2%
3.あまりよくなかった	17	13.6%
4.全くよくなかった	2	1.6%
5.わからない	4	3.2%
無回答	6	4.8%
	125	100.0%

専門家等による講演

回答内容	件数	割合
1.とてもわかりやすかった	5	4.0%
2.わかりやすかった	58	46.4%
3.わかりにくかった	56	44.8%
4.全くわからなかった	1	0.8%
無回答	5	4.0%
	125	100.0%

配布資料

回答内容	件数	割合
1.とてもわかりやすかった	5	4.0%
2.わかりやすかった	55	44.0%
3.わかりにくかった	54	43.2%
4.全くわからなかった	2	1.6%
無回答	9	7.2%
	125	100.0%

意見交換時における講演者の応答

回答内容	件数	割合
1.とてもわかりやすかった	19	15.2%
2.わかりやすかった	74	59.2%
3.わかりにくかった	11	8.8%
4.全くわからなかった	0	0.0%
無回答	21	16.8%
	125	100.0%

ご意見・ご感想

全頭検査を止め、月齢で切ることの無意味さがよくわかった。今日のプルシナー博士の発言を食品安全委員会もぜひ参考にしてほしい。

BSEに関してわからないことが多い中で、今日講演にあったことなどを含め、様々な知見を踏まえて、消費者の安全を優先にして、安全対策を講じていただきたい。

季刊誌「食品安全」中SRMはすべてと畜場で除去されていると記述してあるが、脊柱はと畜場では除去していないと思われる。消費者に誤解をまねくので、正確に記述していただきたい。

・講演資料のもっとくわしいものが欲しかった。

資料はもう少し詳しい方が良かった。又、アメリカの言っている牛の月齢判定法（肉質等で判別する）は、全く科学的でないと思っている。いい加減な手打ちをしないでほしい。個人的にはアメリカ産牛肉が入ってこなくても困らない。国民の健康・安全に重点を置き、経済的・対米関係におもねらないように望む。

私は衛生検査技師だったのでお話の内容が良く分かりましたが、要旨にグラフが付いているともっと理解し易かったと思います。参加してほんとうに良かったと思います。ありがとうございました。

専門用語リストを用意してほしい（例、アミロイド・N末端）。

生を継続する上でノーリスクはあり得ない。

プルシナー教授は丁寧にQ&Aに応じてくれたが、Qに対して適当なAがなされない部分があった。ex. 20ヶ月齢牛の検査の妥当性。立場上コメントできないこともあるが、何にも触れないのはかえって何かかくしているのではないかと考えてしまう。と、書きました後、教授より全頭検査支持者であるとコメントされたので、ある程度は答えていただいたので評価します。

異状プリオン...とはBSEの病原体なのですか？私は今少し勉強したいと思います。牛の一生免疫の研究を願う...発言の場を与えて頂きありがとうございました。市川市の。

CDI法のプロモではないと何度も念を押していたが、やはり、プロモ以外の何ものでないと感じられたのが残念であった。検査法のデータは興味深かったが、科学者（専門家）が経済的な面も含めた食品安全を語れないのは当然であるが、それが会場に伝わっているのが気になった。

今回のプルシナー先生の講演内容をわかりやすい日本語にして公表してほしい（HPなどでよい）。

講演内容にそくわない質問者が多すぎる。

同時通訳がわかりにくかった。

1. 意見交換会を全国でほぼ毎日、日によっては2県にまたがって開催されています。かつてこれ程の対応を見た記憶がなく、高く評価致していますが、高齢な委員各位の健康が心配です。ご同行の事務局各位も御愛召されます様。2. 今回の講演者は科学分野で第一線級であったかもしれませんが、現職の日本人が保有しているバイアスの実態への理解や、リスクコミュニケーターとしてのご配慮をお願いしたかったと考えます。3. フィードバンが非科学的であるということについて食品安全委員会からのコメントがいただきたかったと思います（講演者の発言について）。

何やら消費者団体、会みたい組織が随分幅をきかせているようです。中立の意見が出ません。

・医学、生化学の専門的な内容で、果たして食品の安全性の議論にふさわしいのかと多少疑問をもつ。

プルシナー氏の講演は難しすぎたと思う。ただ、意見交換で多くの発言が聞けて有意義であった。

検査試薬でビジネスを行っている科学者をこのタイミングで呼びよせてリスクコミュニケーションの場で発言させるのは妥当でない。

アメリカのBSE対策については理解しつつありますが、日本国内の対応ははたして本当の意味での対策をしているのか疑問です。BSE検査に頼るあまり、ピッシングの現状、SRMの完全除却は何をもって担保とするのか、不透明な部分が多過ぎると思います。厚労省の返答もあいまいなものが多く、不信感をいただいています。もっと国内の対応を全てオープンにしていってほしいと思います。このままでは日本が欧米と比較して大きく取残されていくことは間違いないと思います。また、リスクコミュニケーションの開催は良い事だと思いますが、もっと一般の消費者に対するリスクコミュニケーションのやり方はないのでしょうか？参加している人はいつも同じ団体の方ではないのでしょうか？きちんと消費者に対して教育する事が大切だと思います。

消費者の一人として、100%安全はないと思うので、現段階で安全な対策がしてある食品は提供して欲しい。特に肉に関しては強く思う。安全で安い焼肉が食べたい。

新しい検査方法としてCDIのより精度の高い技術レベルを期待する。

配布資料の記載が簡略すぎて講演の内容を反映していない。

本日の意見交換会が食品安全委員会にて有効的である事を願います。

せっかく皆がまじめに聞いてる中で、ヤジを入れる男性が居たのが残念です。事前に、「不規則発言をする方には退席いただきます」とアナウンスしておけば、今後このような場の空気を悪くする人が減るのではと思いました。スタッフの皆さん、おつかれ様でした。

1) 場所について：学校、研修所etc. 教室の部屋の使用を検討して欲しい。メモがとりにくい。2) 資料について：サマリーではなく、講義内容の全体を記述した資料が欲しかった。3) プルシナー教授の講演について：世界の先端の技術、頭脳をもつ方の最新情報が聞けて、大変良かった。

パワーポイント資料は配布してほしい。今回のものは、対日訳をつけてHPに早くUPしてほしい。

配布資料に講演に使った資料が加わっていたら、後で読むときにプラスになるのですが...。むずかしい内容ですので、じっくり考えてみたい。科学的な内容を短時間ではムリなのでは？全頭検査は科学ではないのでは？やはりCDIのセールスマンでは？！

最近の知見が少しはわかった様な気がする。安全委員会として、国民が不安に思っているリスクコミュニケーションの必要性を痛感する。安全委員会の判断は急がない事。

食品安全委員会の方は、プルシナーさんの講演についてよく検討され、中間とりまとめの見直し、全頭検査の継続を是非、ご決定下さい。

・全頭検査の見直し案に反対の意を益々強くしました。勿論アメリカの輸入肉には反対です。食品安全委員会はこの講演を参考にすべきです。意見交換会はただ聞くだけでなく、慎重に判断して欲しいと思います。

“最初に結論ありき”で後から国民の声を聞くというやり方はすべきでない。全頭検査の継続とSRM除去の維持は、牛肉の安全確保にとり車の両輪であるから、見直しは現在不要である。

・前もっての質問に対する回答が頂けないのですが、いずれ食安委のHPに掲載されるのでしょうか?!・前々回に引き続き、罵声をあげる男がいて大変恐く思いました。まともな意見交換会にならないので、すぐ退場させて下さい。とても恐いので、次回は出席させないで下さい。2回目です。・食品安全委員会が安易な数字を出してしまったことで、誤解の種をまき、数字が一人歩きして輸血や院内感染対策の安全確保の妨げになっていることを憂慮します。誤解するのは先方も知れないが、種をまいた責任の一端、放置責任は食安委にもあると存じます。20ヶ月という区切りがナンセンスなことがわかった。末梢神経から検出され、筋肉や血液からも検出される可能性があるならば、「潜伏期間中の牛を排除するしかない。・プルシナー氏や先日いらした英国の学者は「どんな動物もプリオン病になりうる」「鳥や豚も感染する」と言われていた。ということは、リスクある共食いを避けなければ、プリオン病の発生が他の家畜でも起こりうるということなのに、現実には共食い(油脂なども含め)が続いている。大変遺憾に思います。・現行のエライザ法はプロテアーゼを使うので、月齢がいくつであろうと陰性と出てしまうことがあるということであれば、飼料管理が何よりも大切なことから、米国に一番求めなくてはいけないのは飼料管理の徹底であるはず。輸入リスク評価に反映して欲しい。今日のプルシナー先生のスライドで問題のない部分のみのスライドをHPに是非UPして下さい。宜しく願い申し上げます。フグ毒と一緒にする人がいて困る。フグ毒は院内感染しない。唐木教授の影響だと思えます。誤解を招くので、改善させて下さい。全ての意見交換会において、利害関係者が立場を名乗らず、消費者の顔して発言したり、大量FAXをしたりするような業者をそのまま出席させていることに、疑問を感じる。発言の偽装をしようとした利害関係者は排除すべき。

子ども達の命のことを思えば、やはり、きちんと検査した肉を食べさせたい。先生がおっしゃっていたように、日本の今の検査法を守り続けて欲しい。安易な米牛輸入再開は、日本の未来をつぶします。行政は、日本人の命をあずかる重要な役割を、是非、責任もって果たしてください。

スクリーンの位置が低くて、プレゼンテーションが見難い。

配付資料のみでは不十分であった。

プルシナー博士の講演については、若干、専門的で理解しづらい面があった。プリオン研究第一人者としての意見として、出来る事は何でもやった方が良いというのは正論かと思う。質問者同士のやり取りにおいて実に無意味な一面を感じた(リスクコミュニケーションとして)。

全頭検査、SRMの再認識をした。

何事についても絶対とか100%というのは、人間の知識に基づいた行為についてはあり得ないのは事実。しかし、食品について言えば「長い経験に基づき判断され、変化も自然の摂理のもとに起った」ものと「人為的に起された変化」を同列に扱うべきではない。科学的根拠と良く言われるが、後者については、知識の蓄積に乏しく、「単に判っていない」との同義語に近い。その観点からBSEやGMO等のようなものの判断は極めて慎重に、まずは判断の前に知識の蓄積、検出法の開発を優先すべきである。21ヶ月未満ではBSEが発見されていないから20ヶ月で線を引くというのは「科学的判断ではない」と言わざるを得ない。そのためにも、全頭検査はmustである。座長代理の金子氏が東京新聞のインタビューに答えたコメントはどう理解するのでしょうか?何故ADIのように安全率という考え方を導入しないのか?少なくともプルシナー教授は全頭検査を前提に未検査牛は食べないとしているのです。

考え方、立場の違いがあっても、同じ場での意見交換には十分な意義がある。

司会者が前の消費者団体ばかり指すのはおかしい。リスクコミュニケーションになってない!!CDI TESTの売り込みに感じた。今回が一番最低のリスク。前の外国の方の意見と全く違うので、余計混乱する結果になると思う。なぜ、この様な人を選定したのか理解できない。牛肉は危険だから食べるなど言うことですか?はっきり、委員会が言わないから、長引いてどんどん税金もかかり、混乱不安が増している。非常にがっかりです。もっと食品としての議論と他の食品に比較してのリスクの議論をすべきです。科学的すぎて、一般国民が知りたいのは、他の食品と比べてのリスクの程度です。何も食べれない国にしたいのですか?タバコをなぜ禁止しないのですか?タバコの方が世界的に見て危険となぜ思わないのですか。

有難う御座いました。

Risk communicationは意味ない。「日本は一体何が食べたいの」と言われる、世界から。そんな日が近いと思う。皆なんだかんだで昨年の今頃まで世界中の肉を食べていた。ある意味日本国民というか、世界がプリオン人体検査をしていて、日本では一人も患者がいなかったのである。BSEを科学者のもつての源、おもちゃにして良いのか?この時期にわざとPRUSINERを呼んだのか?

2時間半も時間を掛けて全く得るものがなく、時間と税金のムダ。全頭検査支持派vs不支持派(米国牛肉解決反対派vs賛成派)の対立は、全く変わることなく、自分達に都合の良い情報だけに耳をかしている。教授も日本人の程度の低さを目の当たりにして、笑うしかない様子だった。

BSE対策には、SRMの除去が最優先であり、日本も国際的な基準で対応すべきである。

食の安全に関する立場として、BSEが科学的に立証でき、防止できる研究が判明するまで、リスク管理評価、更にリスクコミュニケーションを行う必要があります。経済合理性優先での問題は、21世紀に入り、今後、生き残るための知恵を行政、共に正しく公報し、判断していく事が大切です。

もう少し詳しい講演要旨が欲しかった。

100%の安全を求めるのは、理想論(理想を追い求めし、ゴールは無い)だと思います。但し、現実論としてどこまで100%に近づけることが出来るかが難しい。

当日配布の資料をHPにきちんと掲載して欲しい。貴重な資料があったと思う(訳さなくてもよいから...)

1)講演内容が余りにも専門的過ぎる。学会報告会ではなく、「消費者」との意見交換のための講演としてはふさわしくない。

リスクコミュニケーションに参加でき、感謝します。本日の資料をHPでUPしておいて下されば、事前に読んで学習出来たであろうと考えます。情報をもっと開示して下さい。

プルシナー先生の質問に対する丁寧なご回答には、心から参加して良かったと思えました。質問に関する時間を十分に取って頂いたことが何よりでした。残念ながら、質問者の中には、先生の講演の内容をよく理解されず、自身の信条を話された方があり、少々残念に思います。先生の誠実なお人柄がうかがえて幸いです。

配布資料はわかりやすいが、先生の講演に関する図などの参考資料が入っていると、もっとわかりやすくなるのではないかと思う。

私自身のBSEに対する知識の少なさがよくわかり、大変良かった。

特に牛肉に関して、BSEは食品安全上、絶対に安全であることは云えない。従って、米国産牛肉輸入の解禁は中止すべきであると再確認致しました。

BSEの全頭検査が必要だということが確信出来て良かったです。米国等からいろいろあると思いますが、全頭検査で頑張ってください。本日のご案内いただき、うれしかったです。又、お知らせ下さい。静岡市消費者協会。

・事前にDr. プルシナーと講演のポイントを打合せ、的を得た内容として欲しかった。・特にVCJDの発生とBSEの関連について。

日本の対応についてよりも眼前にせまっている米国の解禁のリスクを検証して行って下さい。自給率が50%を切っている中、米国産牛肉は必要と思います。

講演者の先生が私達の立場に近い方であったので、本当にうれしかった。異常プリオンは、何才から以下はないという事が確定していると言ったことはないという事もわかり、私としては全頭検査が必要と確信できた。

食品安全委員会の専門調査会に、何人の専門家がいますか。何で先生が座長なの？BSE検査について「いい加減で、やっても仕方がない」などと発言する(先生の事です)人間は、科学者として失格である。そういう人間が「科学的」「国際的」などと発言するのは笑止。老害、太鼓持は退散すべき。Dr. プルシナーもおっしゃる通り、科学と政治を混同すべきでない。正確な科学的知見(まだわかっていないことが多いという事)を踏まえて、例えば米国牛肉の差別表示をして輸入するなど、政治的決定が必要。国民をごまかすような(=そうとられるような)やり方はだめだと、今回の事例でわかっているじゃないですか!!

プルシナー氏の資料は、抽出でも良いから、配布の必要があったと思う。極めて専門的なことに、感想、コメントを加えられると、聞いていた説明が全て飛んでしまう。残念。「未発表だから配らない」としたのでは理解出来ない。

全頭検査にこだわることの非科学性こそ問題です。350万頭で14頭の数字からも明らかです。「危険部位の除去」こそ最大対策です。

プルシナー教授の全頭検査論には大いに異議あります。ミスキャストと思います。

特定危険部位さえ取除けば安全と聞いているが、一部自治体では3年間全頭検査をするのはおかしいのではないかと。又、それが我々の税金から出ているのは、馬鹿げていると思う。

内容が難しい。一般消費者が理解出来るものでなければ意味がない。消費者団体がうるさすぎる。消費者団体を除いたリスクコミュニケーションを求める。

特に最後の方の発言についてですが、質問者はCDI法の特長を把握出来たのではと思います。逆にそれをプルシナー教授に通訳された方の通訳が悪かったのではと思います。問2については、ある程度仕方ないとは思いますが、講演内容を補足する資料としては不十分と感じました。

プルシナー先生の御意見が、食安の答申に反映されるよう望みます。リスコミが、単なる行政の見解の強制にならないよう、これだけの消費者の反対、不安を取り上げて下さい。アメリカ牛の輸入は時期早尚です。

・賛意を表さない。反対を示さないのがリスコミの原則。早めに制する司会の腕が求められる。・司会に加え、金子先生か日本の専門家が必要に応じて解説すると良かった。